松下幸之助の健康観

病の経験と世界観をつなぐもの

Matsushita Kōnosuke's View of Health：

A Key to Understanding the Link Between His Illness Experience and His World View

川上 恒雄（*KAWAKAMI Tsuneo*）
ＰＨＰ研究所松下理念研究部主任研究員

1. はじめに
2. 結核 —— 死の不安と克服
　発症とその後の生活の変化
　治療について
3. 不眠症 —— 生涯の悩み
　発症の時期と要因
　睡眠薬の服用
4. 世界観の奥にある身体的経験
　「健康の原理」
　「物心一如の治療」というレトリック
　生への執念と「生命力」
5. おわりに

1．はじめに

松下幸之助（以下、幸之助）は世界観（宇宙観および人間観）の形成にあたって、さまざまなヒトやモノから影響を受けた。その「さまざま」を、因数分解のようにはっきりと解きほぐせないのが、幸之助の世界観の厄介なところである。本人が世界観の由来を語っていないからである。しかし、非学術的文献を含めた多くの論考はこれまで、そうした由来の解釈を試み、たとえば、幸之助がその生い立ちにおいて出会った人々から学んだことや、商売のイロハを身につけた大阪（とくに船場）の商業文化・伝統、仏教や神道など接した宗教、新聞・雑誌やラジオなどの大衆メディア —— などをあげてきた。筆者もそのひとつとして、昭和初期から1950年代前半まで幸之助は宗教団体「生長の家」関係者と私的交流があり、同教の世界観の影響を強く受けていると指摘したことがある[(1)]。

しかし、このような他者からの影響を論じることは、幸之助の世界観を理解する一助となる半面、幸之助が世界観を構築する主体性という側面を曇らせてしまいかねない。幸之助にかぎらずだれであろうと、人生で出会ったヒト・モノすべてから大きな影響を受けるわけではなく、取捨選択という作業を、意識的のみならず無意識のうちにでも行っている。松下幸之助という人物の個性は、そのような主体的な取捨選択の結果として浮かび上がってくるのである。

取捨選択の規準は一般に、生涯不変ではないものの、そう簡単にぶれるものでもない。とくに規準の根幹を構成している観念は、往々にして理屈にもとづく次元を超え、信念とでもよぶべきものである。幸之助の場合、そのような信念のなかでも、自身の健康観（あるいはその裏の「病気観」）が確固たるものとして存在したのではないかと、筆者は考えている。というのも、病気がちであったからこそ、生きる力の源

や、健康が脅かされる不運などについて、深く考えたり、あるいはじかに身体で感じ取ったりしていた可能性が高いからである。また、20歳の成人になる前にすでに両親と5人の兄姉を失っているという、あまりにも悲しい現実もまた、偶然ではすまされない何かがみずからの身体に作用しているという見方を、強固にしたと思われる。

このように、幸之助の健康観（あるいは「病気観」）というのは、とくにだれかから教わったりしたものではなく、幸之助本人が自身の病気や家族の死を考えざるを得ないところから形成されているという点で、幸之助の世界観に強く根づいているとみられる。幸之助の世界観はさまざまなヒト・モノから影響を受けている半面、こと健康観については、他者からの思想的影響に先行して、彼の世界観の（すべてではないにせよ）基盤の一角を主体的に構成していると解釈できるというのが、本稿で論じたい点である。

本稿ではまず、そのような解釈を試みる前に、そもそも幸之助が自身の健康を強く意識した主たる要因である結核と不眠症について、幸之助の経験したことや、その周辺的な事実に焦点を当てつつ、主に公刊された資料をもとに概要を記述する。一般に、結核は身体的病、不眠症は精神的病とみなされるが、戦前において幸之助は両者を同時に経験していたことに注意されたい。

2. 結核 —— 死の不安と克服

幸之助の自伝『私の行き方 考え方——わが半生の記録』のＰＨＰ文庫版は、「文庫版発刊にあたって」という見出しで、次の文章から始まる。

> 私は、今年の十一月二十七日で満九十二歳になる。生来、どちらかといえば蒲柳（ほりゅう）の質で、若い頃、肺尖（はいせん）カタルを患い、医者から、とても五十歳まではもつまい、と言われていた。だから、これほどまでに長生きできるとは思いもよらなかったことで、まことにありがたいことと言うほかはない。[2]

1986（昭和61）年7月、幸之助の亡くなる3年ほど前の文章である。90年をこえる長い人生を振り返り、実業界での成功ではなく、「肺尖カタル」（結核の初期症状）の話から始めたということは、それだけこの病の経験が幸之助の記憶に強く刻み込まれていたことを物語っている。なお、本稿では以降、幸之助の「肺尖カタル」のことを、とくにその病名を強調しないかぎり、たんに「結核」と記す。

発症とその後の生活の変化

幸之助によると[3]、大阪電燈に勤務していた18歳のころ、浜寺（大阪府堺市）での海水浴からの帰り、血痰（けったん）を吐いた。医者は肺尖カタルと診断し、帰郷してしばらく養生しろという。しかし、両親がすでに亡くなっており、幸之助に帰るところはない。大阪電燈で幸之助は日給制の職工だったので、生活するには長期休暇をとるわけにもいかない。やむを得ず、3日ほど勤務しては1日休むというかたちで仕事を続けたという。

死を覚悟した。しかし、どういうわけか、病状が悪化しない。1年少したつと、勤務を休む日数も次第に減ってきた。その一方で、養生するには嫁が必要だと姉に日ごろからいわれており、1915（大正4）年、20歳のときに19歳の井植むめのと結婚する。結婚前に、結核のことは、むめのに話さなかったという。

幸之助はそのころ、自分の健康状態を考えると、生活を維持するにはなかなか休めない日給の仕事を続けるのは不安であるとの理由から、大阪電燈を辞めて独立したいという思いを強くする[4]。そして、結婚の約2年後に実際、独立して事業を立ち上げる。「不健康またけっこうなり[5]」という幸之助のことばは主に、仕事を他人に任せることの効用という文脈で用いられ

ることが多いが、一方で、結核にでもかからなければ、むめのとの結婚も事業の独立もなく、のちの成功はありえなかったという意味も含意している。

以上が、『私の行き方 考え方』文庫版の冒頭で「若い頃、肺尖カタルを患い」と幸之助が述べた「若い頃」の生活と、その後の変化についてのあらましである。

治療について

初期の結核にかかった大正期の前半に、幸之助がどの医者からどのような治療を受けていたのか、その詳細については不明である。1958（昭和33）年のエッセー「私の闘病戦術」には、以下のような記述がある。

> 薬といっても、その時分は注射なんていうものもあまりなかったころで、もちろんストマイなどというような特効薬もない。普通の街医者のきまった薬しかのまないわけだ。[6]

この発言によると、近くの診療所に通い、注射は打たず、与えられた薬を飲んでいたようである。ところが、その約20年後の上坂冬子のインタビューに対しては、結婚の話に続いて、次のように語っている。

> その時分に、体が熱うなるカルシウム注射がありました。血管に入れると体がホカッとしますわな。ああ、薬が効いたから、もうだいじょうぶや、ちゅうようなもんですわ。結婚して七年目に子どもができて、商売も多少うまくいくようになって、やれやれというとこで、結核の専門病院に通い始めたんやけど、そのころやったなあ。淡輪（たんのわ）の駅からおりたところで、三回ほど血ィ吐きました。[7]

このインタビューでは、注射を打っていたと述べている。発言が矛盾しているようだが、どうやら「その時分」とは、1915（大正4）年の結婚の直後ではなく、1918（大正7）年に大阪の猪飼野（いかいの）から大開町（おおひらきちょう）に引っ越して以降のことかと思われる。『私の行き方 考え方』によると、

> 私は大正十一年事業がやや緒につき、五十人の従業員を擁するようになり、はじめて二百坪の工場を建設した大開町一丁目に移った（中略）。
>
> いま記憶をたどると、当時私は肺炎をわずらい病弱の身を養いつつ経営していたので、そのころ同町の木庭（こば）医師のもとに通っていた。そうしてカルシウム注射を相当長い期間続けていたのである。[8]

時期の前後関係で誤解を与えやすい記述だが、大開町に移ったのが1918（大正7）年、工場竣工が1922（大正11）年である。「木庭医師」とは、町医者の木庭永助を指す[9]。大阪電燈時代の医者は注射をしなかったというのだから、カルシウム注射は木庭のもとに通い始めてからしたのだろう。結核の治療薬がなかったころは、カルシウム注射を打つことが一般的な対処法だった。

ところで、幸之助自身は、肺尖カタル、つまり初期の結核にかかってから1年強で症状が落ち着いてきたと述べているにもかかわらず、なぜまたその数年後に大開町でカルシウム注射を打つようになったのか、その経緯が不明である。考えられるのは、結核の再発である。

> ……大正の十二、三年頃のことです。きのう若い時に肺病になったという話をしたでしょう。それがまた、商売を始めてから六、七年たって再発したのです。その時は、もう三、四十人の従業員もいて、商売もうまくいっていました。
>
> だから、肺がまた悪くなっても、今度は入院する金もある。大阪の近くの堺からす

ぐ南に下った淡輪というところがありますが、当時、その淡輪の海岸沿いに肺病専門の病院があったわけです。そこで、そこに入院しようと思って、単身南海電車に乗って、診察を受けにいった。（中略）

そうして、三カ月そこへ入院していたわけです。[10]

ひとつ前の『私の行き方 考え方』からの引用によると、社員が50名ほどになっていた1922（大正11）年ころ、木庭医師にカルシウム注射を打ってもらっていた。いまの引用ではしかし、30～40名ほどの社員のいた1923（大正12）年あるいは1924（大正13）年に、淡輪の肺病（結核のこと）専門病院に3カ月入院したとある。なお、先の上坂冬子のインタビューでは、入院したときは社員が20～30名だったと述べており[11]、さらに社員数が少ない。

当時の従業員数については記憶違いがあるかもしれないが、年号については幸之助の記憶に従うと、結核が再発して入院する前に、カルシウム注射を打っていたことになる。3年ほど続けたそうだ[12]。したがって、大開町に移ってからしばらくして、注射を打ち始めたと考えられる。しかし、カルシウムは結核の特効薬ではないためか、結局は再発して入院したとのことである。

淡輪の病院に入院後の幸之助の症状の変化はよくわからない[13]。本人によると、結核による病弱状態が続いたのは、1939（昭和14）年か（松下病院を建てた）1940（昭和15）年ころまでだったとのことである[14]。

3. 不眠症 —— 生涯の悩み

結核に加え、若いころから幸之助を悩ます問題として、不眠症があった。結核は一応、戦前に治ったことになっているが[15]、不眠の悩みは生涯、幸之助に付きまとった。幸之助いわく、戦前の睡眠時間は3時間半、戦後は睡眠薬を飲んで4時間程度だった[16]。

発症の時期と要因

いつから幸之助は不眠に悩まされるようになったのか。「生まれつき」と何度か述べている[17]ものの、具体的に問われると、「商売しだしてまもなく[18]」「商売した当時から[19]」と回答している。つまり、松下電器を創立した1918（大正7）年、23歳のとき以降が事実のようである。ほかにも、「私は満二十三歳の年に商売を始めたのですが、一日に三時間半ぐらいしか寝ませんでした[20]」「私は満二十三歳の年に自分で商売を始めたが、そのころでも一日三時間半ぐらいしか眠らなかった[21]」と語っていることから、その点が裏付けられる。

したがって、「生まれつき」というよりはむしろ、独立したことによる社会的立場や環境の激変で、幸之助に精神的負荷が相当に重くかかったことが不眠の主たる原因かと思われる。あるいは、「生まれつき」をいうのであれば、幸之助本人のいう「神経質」な性格[22]が、独立により、睡眠を妨げるほどに増幅したのであろう。創業時からの幸之助を知る義弟の井植歳男によると、幸之助は仕事のことを考えすぎで、不眠症になったという。

わしは若いときの松下を秀才とも英才とも思わなんだ。だが、仕事に対する熱意はすごいもんだった。昔はめしを食うても仕事のことばかり考えておるので、なにを食ったか、どんな味がしたのか知らんのですよ。体は非常に弱く、よく病気をしたし、あまり考えるので強度の不眠症にもなった。血圧もべらぼうに高かった。[23]

井植の発言が事実とすれば、若き幸之助の頭は仕事のことでいっぱいで、神経の高ぶりを夜になっても抑えることができなかったようである。戦前においてはそれでも、睡眠薬を服用することはなかった。睡眠薬を飲み始めたのは、

戦後になってからのことである[24]。

睡眠薬の服用

幸之助は戦後に睡眠薬を飲み始めた理由について、「敗戦後の困難な状況に直面し、その困難な状況をどのようにすれば切りぬけていくことができるのかということで、四六時中頭をつかい、心も張りつめていた[25]」からだと述べている。「困難な状況」とは、1946（昭和21）年から1950（昭和25）年にかけてＧＨＱにより公職追放等の制限を受けたことを指しているようである。

このころの睡眠薬は、睡眠作用にすぐれてはいたが耐性や依存性の強い「バルビツール酸系」が主流だった。幸之助の当時の医師が、そのような睡眠薬を処方していたかどうかは、不明である。あるいは、本人の発言とは異なり、当時はまだ、睡眠薬を常用していなかった可能性もある。というのも、幸之助が1951（昭和26）年に初めて渡米した際、相当量の飲酒により不眠に対処しようとしていたと、同行者のひとりがのちに回顧しているからである[26]。睡眠薬を携行していたならば、寝酒の必要もなかったはずである[27]。時差があり、しかも慣れない海外ということで、幸之助の不眠がひどくなることが通常なら予想されたにもかかわらず、睡眠薬をもって行かなかったということは、このころまだ、日常的には服用していなかったことを示唆している。

それでは、いつから睡眠薬を毎晩飲むようになったのか。その手がかりとして、幸之助が1961（昭和36）年に会長に退いたばかりのころ、幸之助の生活を日記風に追った『週刊文春』の記事がある。そのうち、9月5日の記録に注目したい。

> この日は朝八時半、松下病院（付属病院）で、健康診断を受けた。毎週必ず実施される。（中略）
>
> 松下さんの身体を三十年間診ている橋本院長はいう。
>
> 「大変に病弱な身体なんですが、その病弱が無病息災を生んでいるのでしょう……」
>
> ただ、会長の持病？　に不眠症というのがある。一時は睡眠薬を飲んだりしたが、全然効果がない。
>
> 昼間、あんまり頭脳を酷使し過ぎるのと、夜寝ながらメモと鉛筆を持って、ものを考える癖がこうさせたのだそうだ。
>
> はたして、社宅のベッドの枕元には、メモ用紙と五、六本の鉛筆があった。（中略）
>
> その他に、エビオスの大壜一コ、太田胃酸一缶、アトラキシン一箱、ローヤルゼリー内服薬大箱一コ、蜂蜜一壜、栄太楼の梅干飴一缶、ビタオール大箱一コ、体温計、爪切り、手鏡……などが、キチンと並べて置かれている。[28]

ここに列挙してある薬やサプリメントは当時すべて、医師の処方箋なしに、薬局で購入できたものである。「エビオス」と「太田胃酸」は現在でもよく知られる胃腸薬である。ローヤルゼリーは、1958（昭和33）年に初めてフランスから輸入されたのをきっかけに、当時は不老長寿の薬と騒がれていた[29]。「ビタオール」については詳細不明だが、ビタミン補給の栄養ドリンク、または錠剤ないしはカプセル状のサプリメントかと思われる。

注目すべきは、「アトラキシン一箱」である。「アトラキシン」は、向精神薬の一種であるトランキライザー、つまり精神安定剤である[30]。「睡眠薬」とは全面的にうたっていないものの、神経の高ぶっている人には、夜に飲むと、睡眠を促す効果があるとしている。したがって、睡眠薬の一種とみなしてもよい[31]。上の引用では「一時は睡眠薬を飲んだりしたが、全然効果がない」という記述があり、それが幸之助本人か松下病院の橋本徳治郎院長のどちらの発言によるのか判断がつきかねるが、「アトラキシン」が枕元にあるということは、幸之助がそれを常用

していた可能性が高い。

このことからひとつ推測できるのは、市販の薬が数多く枕元にあるように、睡眠薬の入手についても、医師の処方によるのではなく、幸之助が独自に市販の薬を購入し、常用し始めたのではないか、ということである。

日本では、1948（昭和23）年に、「平和の眠り」という宣伝コピーで、塩野義製薬の「アドルム」が人気を集め、睡眠薬の代名詞ともなった[32]。しかし、その後、作家の坂口安吾が乱用で中毒となり、東京の女子高生が多量の服用により相次いで自殺するなど、「アドルム」は社会問題化した[33]。幸之助が「アドルム」を服用していたかわからないが、このように比較的強い睡眠薬でも、当時は薬局で購入できたのである。

また、1950年代から大衆薬市場が急拡大した[34]が、副作用が社会問題化する1960年代前半まで、医薬品の販売に関する規制は相変わらずゆるかった。トランキライザーのみならず抗生物質なども市販していたのである[35]。とくに1950年代後半は、「ノイローゼ」「ストレス」といったことばが流行し[36]、精神面での健康に対する関心が国民的に高まった。幸之助の服用していた「アトラキシン」は、第一製薬がそのような時代を背景に発売した、人気の高いトランキライザーだった。宣伝広告では「精神神経安定剤」と称し、従来の「催眠・鎮静剤」とは異なって、安全性の高いことを強調している[37]。したがって、成人男性のみならず、受験生や主婦、さらには「催眠・鎮静剤」の常用癖がある人にまで、服用をすすめている。

しかし、そのトランキライザーも、1960年代半ばには、依存性や乱用が国内だけではなく国際的にも問題となり、1970年代前半に、市販が全面規制されるにいたる[38]。そのころには、幸之助は、市販ではなく、医師の処方した睡眠薬を飲んでいたようである。というのも、1970（昭和45）年のインタビューで、服用している睡眠薬名を問われた際、「それは分からんのですけれどもね。お医者さん任せで[39]」と回答しているからである。ちなみに、1976（昭和51）年に幸之助の主治医となった横尾定美（さだよし）は、幸之助の睡眠薬が「ネルボン、ベンザリン、ハルシオンなど[40]」であったことを明らかにしている。

4. 世界観の奥にある身体的経験

本稿ではこれまで、幸之助の結核と不眠症について、主に公刊された文献からわかる範囲で、その推定される要因や実際の治療をまとめてきた。次に、そうした病を幸之助が主観的にどのように受け止め、自身の世界観構築に反映したのかを検討する。

「健康の原理」

まずは、『ＰＨＰのことば』（ＰＨＰ研究所、1975年）に収録された「健康の原理」（1950年11月発表）という、まさに「健康」をテーマにした「原理」があるので、幸之助の健康観を理解するひとつの手がかりとして焦点を当ててみよう。以下が、「健康の原理」の全文である。

> 人はみな本来健康なものであります。病気は、自然の理法にたがうところから起こってまいります。
>
> 健康を保つ方法は人によって異なります。人おのおのに与えられた資性に従って生活の道を守れば、弱い人は弱い人なりに健康を楽しむことができます。
>
> お互いに自然の理法を知ることにつとめ、自分の強さに応じた生活を営まなければなりません。それによって健康が保たれ、繁栄の道が開かれます。[41]

ここでは、「健康」と「自然の理法」とが対応関係にある。したがって、「病気」は「自然の理法」に則していない状態である。それでは、「蒲柳の質」の幸之助の生活は、「自然の理法」に反していたというのか。幸之助によると、そ

うではない。「健康」と「頑強」とは異なる概念であり、後者については先天的強弱度があるという[42]。この強弱度を自己認識し、それに応じた生活を送ることで、「健康」が維持されるのである。それが「自然の理法」に従った健康保持の方法である。「弱い人は弱い人なりに健康を楽しむ」とは、そういうことである。

この「健康の原理」は明らかに、幸之助自身の病、とくに結核の経験を反映している。幸之助は戦前、病で床に臥しているときは無理をせず、部下に仕事を任せた。松下電器の事業部制も、その意味では任せることを制度化したシステムだった。事業部制の成功は、「不健康またけっこうなり」の象徴である。そして、「蒲柳の質」らしく、ときに休みつつ会社経営をしているうちに、なぜか健康状態が改善し、結核が治ったのである。

不眠症については、治ることはなかったが、気にやむことをせず「素直に承認[43]」し、「これはこれで私にふさわしい[44]」と考えるようにした。その一方で、特別な健康法ももたず、「自分は体弱く生まれついているんだから、それを無理に丈夫にするということを考えないほうがいいじゃないか、ごく自然に、弱い体のままに維持したらいいじゃないか[45]」というように、過剰な健康への志向も否定している。

このように、「健康の原理」は、『ＰＨＰのことば』に収録されているそのほかの原理や教えと比べれば、幸之助の非常に個人的な経験を反映している。つまり、それは、ＰＨＰ研究という練られた知的活動の成果というよりもむしろ、幸之助の素朴な思いが表明されていることに、注意を払うべきである。

「物心一如の治療」というレトリック

幸之助の「健康の原理」は、その文面を忠実に解釈すれば、以上のような見方ができる。しかし、筆者には一点、幸之助の薬の摂取を、この「原理」に照らして、どのように理解すべきなのかという疑問が残る。「人はみな本来健康なものであります。病気は、自然の理法にたがうところから起こってまいります」と主張するのであれば、化学物質の摂取はできるだけ控えると考えるのが一般である。

「人はみな本来健康」という見方は、幸之助の戦前からの人間関係を考えるとおそらく、宗教団体「生長の家」の関係者による影響である。幸之助は1939（昭和14）年、結核が治ったか治りかけたころ、社員への講話（「健康なりという自信」）で、次のように述べている。

> 客年（かくねん）来、とかく健康不十分で毎日出社できず、はなはだ遺憾であったが、近ごろは体の調子もすこぶるよくなり、これからはひとつ大いにやろうと張り切っている次第である。
>
> 従来自分の体は頑健なほうではなく、したがって意識的にも健康体なりとの自信ももてず、人に向かって「どうもぼくは体が弱いほうで」というようなことをもらしたものであるが、近ごろこれは大きな間違いであると気がついた。なるほど人の体質にはそれぞれ強弱のあるのは事実であるが、まず自分自身で弱いのだと決めてしまう必要はない。昔から「健全なる精神は健康なる体に宿る」といわれているが、その逆に、健全なりという自信が健康体をつくる例もすこぶる多いのである。[46]

戦時体制という時代背景のもと、肉体の健康と精神の強さを強調するのはありふれているとみることもできる[47]のだが、自分の肉体的健康について弱音を吐くことについて「近ごろこれは大きな間違いであると気がついた」とし、「健全なりという自信が健康体をつくる」と発言していることに注目したい。これは、「近ごろ」（昭和10年代初めに）病気治しで注目された「生長の家」の、「肉体は心の影」（肉体が病気であるという認識は心の反映）という教えによく似ている。このような「生長の家」的な見方を受け入れて

いる[48]ということは、心がなかなか落ち着かなくて不眠症に陥っていた幸之助が、心の状態の身体に対する影響を直観的に理解していたことを示唆している。

しかし、幸之助は「生長の家」の教えをすべて受け入れたわけではない。「生長の家」によると、人間の実相には物質（肉体）がなく、したがって肉体的病なるものはない。理論上はそれゆえ、物質である薬の摂取に意味はない（重要なのは心のあり方である）。一方、幸之助の場合、人間は本来健康であるという見方を共有していても、「生長の家」のような極度に唯心論的な考えをもっていない。

また、幸之助が「健康の原理」を発表したころ（1950年前後）、呪術による霊の浄化とそれによる病気治しを強調した「世界救世教」が教勢を伸ばし、メディアの注目も集めていた。この教団も幸之助同様、自然の摂理のもとでの健康の本来性を強調している。しかし、「世界救世教」は農薬を一切用いない自然農法・自然食の重要性を唱えているように、化学物質である薬の摂取には消極的である。心身霊の調和した人間の自然性を損なうからである。

ところが、幸之助の場合、人間は本来健康であると、「生長の家」や「世界救世教」などの宗教と似通った主張をしていても、薬のことになると、見解は相違した。事実、こうした宗教の教えを「迷信」だと切り捨てている。

> ……近ごろこれらの宗教では信仰の力で病気を癒（なお）すということを盛んに言っております。医者も薬も要らない、ただ何々の神さまを信仰すればよい、心の働きで肉体の病気は癒るというのであります。（中略）
>
> しかしながら、ここまでくればもう明らかに迷信だと思います。たしかに心の働きというものは、肉体に大きな作用をします。そのことは間違いないのでありますが、一面、物もまた肉体に大きな作用をするのであります。心の力と物の力と、この二つの作用を同時に見なければならないのであって、それを一つの力だけで癒そうとすることは、決して完全な治療方法だとは言えないのであります。従って、私たちは、心の安定も求めなければなりませんが、同時に肉体の科学的な治療も受けなければならない、すなわち物心一如の治療方法をとらなければならないのであります。宇宙根源の力は、心の働きを与えていますが、同時に物をも与えているのであります。すなわち、医薬もまた宇宙根源の力から与えられた天地の恵みなのであります。でありますから、医薬の力を借りることは、決して神さまを冒瀆（ぼうとく）することにはならないのであります。むしろ一方に片寄る方が、天地の恵みを素直に受けていない姿だと言えるのであります。[49]

幸之助は、戦前の社員に対する先の講話で述べたように、心のあり方が肉体に作用することを認めている。しかし、それは半面の真理であって、肉体の健全化には同時に科学的な（つまり物質的な）治療も必要であることを主張している。「物心一如の治療方法」である。そのうえで、宇宙根源の力は心だけでなく物にも働きを与えているとし、物である薬もまた「宇宙根源の力から与えられた天地の恵み」であると述べている。

ただ、薬を「天地の恵み」とみなすのはいささか誇張表現ではないかと思うのは、筆者だけではないだろう。また、薬の服用に消極的な宗教に対し、「天地の恵みを素直に受けていない」と批判するのも、幸之助にしてはややオーバーな批判ではないかとも思われる。しかし、薬の摂取が幸之助本人にとっては生死の問題にかかわっていたということもまた、考慮に入れるべきである。結核による死の恐怖にも直面したことのある幸之助にとって、心のもち方いかんで身体の症状も変化するなどとのんきなことはいっておられず、薬物の投与によってなんとか

生きてこられたという思いがあるのだろう。

結核にかかっていたころ、薬は幸之助にとってまさに生の実感を与えるものだった。とりわけ「カルシウム注射」の経験がそれを伝えている。たとえば、先に引用した上坂冬子のインタビューでは、カルシウムを「血管に入れると体がホカッとしますわな。ああ、薬が効いたから、もうだいじょうぶや、ちゅうようなもんですわ」と発言している。また、1976（昭和51）年の女優の森光子との対談では、「カルシウム注射」について次のように語っている。

> あれをやってもらうとね、いかにも効くように思うたんですよ。手の血が熱うなりましょう。効いてるんやなと。お医者もね、これが今のとこではこれが一番ええんやと。何でええんですかと、先生に尋ねたらね、だんだんカルシウムがね、患部を取り巻いて固まってしまうんやと、そういう説明をしてたんです。そしてやってもらうとね、身体中熱うなるんですよ、カルシウムは。はあ、効くんやなと思うて、そういうことが一つの心の支えでんな。だからね、その時分はね、そうでんな、カルシウムを、まあ、おそらく二、三年続いたですもんな。千本近うやってるもんな、商売してから。[50]

カルシウムを注射して身体の熱さを感じるそのときが、幸之助の「心の支え」だった。そして、医学的にも効果があると信じたのである。その証拠に、この発言に誇張や間違いがなければ、3年間で1,000本近くも「カルシウム注射」を打っている。つまり、ほぼ毎日、カルシウムを身体に注入していたことになる[51]。

液体化したカルシウムは厳密には「薬」でなかったのかもしれないが、化学物質であることには相違ない。1,000本も「カルシウム注射」を打っていたことが事実であれば、「物心一如の治療」どころか「物質偏重の治療」とみることもできる。しかし、その注射によって「心の支え」があったという意味で、幸之助本人にとっては「物心一如の治療」だったのではないか。つまり、注射による「心の支え」があるからこそ、肉体にマイナスの影響を与えることもないのだと、自己認識していたのではないか。みずからの世界観において「物心一如」を強調したのも、そのひとつの背景として、このような必死の治療の経験があったと考えられるのである。

また、幸之助が会長に退いた1961（昭和36）年、枕元に数多くあった市販薬も、同様に解釈できる。胃腸薬程度ならありふれているが、先述したように、のちに販売禁止になった精神安定剤の「アトラキシン」や、当時は不老長寿をもたらすといわれたローヤルゼリーの内服薬までそろえていた。医者に診てもらうのに不便な生活を送っていたのなら市販薬をそろえることをまだ理解できるが、まったくその逆で、幸之助にとって病院は、そこで生活できる専用の部屋をもつほど、身近な存在だった。それでも市販薬を入手していたのである[52]。

薬を入手するのに、医師に相談して処方箋を書いてもらうという方法に抵抗感を覚えていたという可能性は、ゼロではない。たとえば、のちに幸之助の主治医となった横尾定美は当初、副作用を考え、幸之助に睡眠薬を出すことに消極的だった。そうしたところ、幸之助は怒り出し、「自分は今日まで二十年以上睡眠薬を飲んできている。薬が効かなくならないよう、何種類かを交代で飲むよう処方をしてくれ[53]」と横尾に指示したという。かつての「アトラキシン」のように処方箋不要で入手可能なら、幸之助にとってこのような不都合な事態に直面する心配もなかったのである。

生への執念と「生命力」

幸之助は1970（昭和45）年のインタビューで、「私は三十五か四十まで生きられればよっぽどいい、と思ったんですよ、最初はね。それが四十歳になっても死なないし、五十歳になって

も死なないし、ついに七十五歳まで生きたですからね[54]」と語っている。長生きの結果として、「不健康またけっこうなり」「運命に素直に従う」という趣旨の発言を幸之助はときにするが、これらは回顧的な語りであることに注意すべきである。つまり、あとから振り返れば、不健康を素直に受け入れて無理をしなかったことが成功の人生につながったという物語を、幸之助の場合はつくれるのである。しかし、病に苦しんでいたそのとき、本当に幸之助がそのように思っていたかどうかは別問題である。薬の過剰摂取をしないよう、自身にいい聞かせていたことばかもしれない。現実の生活とメディアでの発言とが矛盾する例など、幸之助にかぎらず、よくみられることである。

結核に対する「カルシウム注射」1,000本といい、市販の精神安定剤「アトラキシン」服用といい、老いを感じ始める年齢での「不老長寿」のローヤルゼリー入手といい、筆者は幸之助の強烈な生への欲求を感じるのである。「物心一如の治療」というフレーズを掲げて、「新興宗教」相手に、真剣になって薬の摂取を正当化しようとすることからも、そう思うのである。薬やサプリメントをよく飲むのも、戦前において、両親と7人の兄姉すべて、そして自分の息子まで失い、自身も結核にかかるという過酷な現実に直面したからこそ、たえず死というものが頭から離れなかったからではないか。

幸之助は、1950年代前半まで『ＰＨＰ』誌に掲載していた「ＰＨＰのことば」や「ＰＨＰの原理」において、自身の世界観を展開する際、「生命力」という語を繰り返し用いている。「生きている」という多くの人にとってありふれた事実が、幸之助にとっては特別なものだったからであろう。「生きている」というよりも、何かに「生かされている」感覚といったほうが正しい表現かもしれない。

「生命力」という概念は無論、直接には「生長の家」の影響であろうし、間接的には、身近にいた加藤大観（たいかん）の真言宗の影響でもあり、より広範には、鈴木貞美の主張する「大正生命主義」という思想潮流ないしは時代精神[55]の産物だとも解釈できる。それはしかし厳密にいうと、「影響」というよりは、幸之助の病という（思想など媒介しない直接の）身体的経験に、概念的な枠組みを与えたのが、こうした宗教や思想潮流だとみなすことができよう。

いかに「生命力」という概念が幸之助にとって重要だったのかは、たとえば『ＰＨＰ』誌に連載の「ＰＨＰの原理」において、1950（昭和25）年の1月号から5月号まで連続して「生命力」をテーマとしていることから明らかである（順に、「生命力」「人間の生命力」「生命力の発展」「生命力の培養」「生命力の永遠性」）。そして、幸之助自身、ぜひこの連載を読んでほしいと人々に語りかけている。

> ……今月号の雑誌に載ってございますＰＨＰの原理の中に、生命力の説明が致してございます。（中略）それはどこから与えられているかというと、ＰＨＰでは、（中略）宇宙根源の力からわれわれは生命を与えられている、生命力を与えられている。その生命力の説明を実は致しているのであります。ＰＨＰ運動の一番大きな基本をなすものはそれでございます。生命力とはいかなるものであるかということが一番根本であります。[56]

> ……人間の本質をよく認識いたしましょう、そうして得た認識にもとづいて、そうして繁栄の道はどこにあるか、幸福を実現するにはどうすればよいかということを考えようではないかということを申し上げておったのであります。（中略）その本質のまず第一はなにかということは、生命力でございます。今月の雑誌をご覧下さいましたならば、ＰＨＰ原理に、生命力の点につきまして載ってございます。（中略）その人間の本質の第一に考えなければならぬことは、いわゆる

われわれが、宇宙根源の力から人間としての生命力が与えられているということでございます。これは人間の本質の基礎をなすものであります。[57]

このように、「生命力」は、幸之助にとって、人間を理解するための根本概念のひとつである。以下、「ＰＨＰの原理」における「生命力」概念の基本的な点だけあげてみる。

①宇宙の万物は、人間を含めすべて、宇宙根源の力によって生命力が与えられている。

②生命力の働きには、物的作用と心的作用のふたつの面がある。

③これらふたつの生命力の働きは、与えられ方が個々のヒト・モノによって異なる。

④生命力は、生きる力に加え、使命の力（生き方を与える力）を帯びている。

最後の④の「使命」という観念の導入により、ＰＨＰ（平和、幸福、繁栄）の実現という実践面に結びつく道筋を理論的に示しており、議論はそこから多方面に発展している。一方、議論の出発点である①～③は、幸之助の個人的経験と直接に関係している。①は、働きつつも結核の症状が悪化しないことに、自分の意志とは別の力が働いていると感じた点。②は、精神のあり方と科学的治療の双方とも大事だとみなした点。③は、家族の多くが亡くなっても、自分は生きているという点。これらの個人的経験は、のちにＰＨＰ研究を開始してからの言語による世界観構築に紛れもなくつながっている。

ただ、「生命力」という概念は、1960年代半ば以降になると、幸之助の著作や発言のなかにほとんどみかけなくなる。1950年代前半までの「ＰＨＰのことば」や「ＰＨＰの原理」において中核的概念だったのとは対照的である。幸之助が1961（昭和36）年に会長に退き、ＰＨＰ研究を再開した当初は、「生命力」はまだ中核的だった。研究会の記録[58]を調べると、同年9月19日（「馬は馬、松は松」）から翌1962（昭和37）年5月12日（「生命力と宇宙の法則の関係」）まで、幸之助の口から「生命力」という言葉が頻繁に発せられているが、なぜかその後はあまり言及されなくなる。

幸之助哲学のひとつの完成形である『人間を考える』（1972年発表の「新しい人間観の提唱」と1975年発表の「真の人間道を求めて」から成る[59]）にいたっては、「生命力」という概念はほとんど用いられていない。代わって、「天命」や「使命」ということばが多用されている。先に幸之助のいう「生命力」には、「使命の力（生き方を与える力）」という意味も含意していることを述べたが、この意味がとくに強調されて「天命」「使命」に代わったのだと思われる。人間が万物の王者であることを主張するには、たんに生きるという意味だけでの「生命力」を用いると、他の生物との区別がつかないことが、ひとつの理由だろう。実際、『ＰＨＰのことば』所収の「人間宣言」（1951年発表）でもすでに、「生命力」ではなく「天命」を用いている（しかし、まだこのころは、その解説に「生命力」の言葉がみられた[60]）。

幸之助の「新しい人間観の提唱」や「真の人間道を求めて」は、それ以前の「ＰＨＰのことば」や「ＰＨＰの原理」を発展させて、人間の本質の解明に迫ったものだとみなすことができる。しかし、その「発展」の過程において、「研究」という知的活動が多く介在していることから、思想としての洗練度は高まったものの、幸之助の個人的信念が噴き出た一種の生々しさが後退したように思われる。「生命力」という概念は、思想的な洗練を妨げていたのかもしれないが、幸之助が身をもって経験した病の苦悩が背景にあるからこそ、どっしりとした重みがあったのである。

5. おわりに

これまでの幸之助研究に本稿が新たに付け

加えるとすれば、次の諸点である。第1に、幸之助が「蒲柳の質」であるにもかかわらず長寿であったことで、幸之助の健康維持の方法や心構えなどが従来は注目されていたが、本稿では幸之助の世界観とのかかわりに視点を広げた。第2に、「不健康またけっこうなり」に象徴される幸之助の不健康効用論は回顧的であることを考慮する必要があり、実際には薬の積極的な摂取から、死の不安、あるいは生きることへの執念が非常に強くあった可能性のあることを指摘した。第3に、この可能性を前提として、病という個人的な身体的経験、そして家族の死という現実から、幸之助にとって極めて重い「生命力」という概念をテコにして、宇宙根源の力を根本にすえた世界観の構築に主体的に向かったことである。

この第3の点はとりわけ重要である。学校教育を十分に受けていない幸之助の思想は、その豊富な人生経験をもとにみずから考えて築き上げたものだという見方があるが、そのような主体的思想形成の一端を具体的に示したことである。幸之助の経験といえば、少年時からの商売人としてのそれを指すケースが多いと思われる。筆者は、それに加えるべき視点として、身体という幸之助が生まれながらにして所有しているものの不調（つまり病）という、直接の経験に着目した。結核という身体の病を通じて人間の生死を考え、不眠という精神の病（そして、精神のあり方による結核へのプラスの効果も）を通じて、心身の相関性（物心一如）や生命力を与える大なる力を、自分の身体とインスピレーションで感じ取ったのである。

ただ、そうした若き日の生々しい身体の経験の記憶は、年齢を重ねるにつれ薄れ、みずからの世界観の合理化や体系化を妨げる要素にもなるのだろうか。後年の代表作『人間を考える』には、「生命力」ということばが用いられていないこともあり、われわれは宇宙根源の力に「生かさている」という、素朴な生の喜びの発露があまり読み取れない。幸之助という人物の思想家としての個性は、ＰＨＰ研究の初期に戻ったほうがよくみえてくるという面も、あるのではなかろうか。

【注】

(1) 川上恒雄「松下幸之助と生長の家――石川芳次郎を介して」『論叢 松下幸之助』第13号、ＰＨＰ総合研究所、2009年。

(2) 松下幸之助『私の行き方 考え方――わが半生の記録』ＰＨＰ研究所、1986年文庫版、3頁。

(3) 主に、松下幸之助「私の闘病戦術」（『実業之日本』1958年4月1日特大号、36-9頁）に情報を依拠している（『仕事の夢 暮しの夢――成功を生む事業観』ＰＨＰ研究所、1986年文庫版に再掲）。ただし、文献によって若干の事実関係の相違がある。この点については、佐藤悌二郎『松下幸之助・成功への軌跡――その経営哲学の源流と形成過程を辿る』（ＰＨＰ研究所、1997年、155-7頁）を参照。

(4) 大阪電燈を辞めたいという主な理由としてはそのほか、自身の改良したソケットが上司に認められなかったことや、検査員としての職務にもの足りなさを感じていたことを、幸之助はあげている。前掲『私の行き方 考え方』（60-6頁）を参照。

(5) 前掲『仕事の夢 暮しの夢』55頁。

(6) 同前、57頁。初出は注(3)を参照。

(7) 『主婦の友』1980年1月号、183頁。

(8) 前掲『私の行き方 考え方』309頁。なお、この引用中に「肺炎」とあるのは誤記で、正しくは「肺尖」である。元の自叙伝『記憶のまま』（松下電器産業株式会社、1952年、146頁）を参照。

(9) 荒川進『苦労と難儀はちがいます――松下幸之助の妻・むめの伝』（講談社、1985年、179頁）を参照。著者の荒川は、木庭の妻のユキノに取材をしている。

(10) 松下幸之助『リーダーを志す君へ――松下政経塾 塾長講話録』ＰＨＰ研究所、1995年文庫版、118-9頁。

(11) 前掲『主婦の友』183頁。

(12) 松下幸之助・田川五郎『明日をひらく経営』読売新聞社、1982年、189頁。『女性自身』1976年8月12・19日合併号に掲載するために行った女優・森光子との対談でも、2～3年続けたと発言している（しかし、この発言

は掲載されなかった)。

(13) 前掲『リーダーを志す君へ』119頁に、入院後「三カ月したらもうよくなった。すっかりはよくならないけれども、一応おさまったわけです。活動していいぐらいに治った」との発言がみられる。会社勤務に復帰できる程度に体調が改善したということなのだろう。しかし、他の文献との発言の整合性を考えると、結核が治ったというわけではなかったようである。

(14) 1962(昭和37)年に、NHKテレビに出演した際の発言による。PHP総合研究所研究本部(編)『松下幸之助発言集17』(PHP研究所、1991年、80頁)に収録。

(15) 『毎日ライフ』1970年2月号(53頁)掲載のインタビューで、幸之助が若いころの「肺尖カタル」に言及した際、医師の石垣純二から「いまでも影がレントゲンには残っていましょうか」と質問され、幸之助は「残っています」と答えている。なお、このインタビューは、PHP総合研究所研究本部(編)『松下幸之助発言集14』(PHP研究所、1991年、60頁)に再録している。

(16) 幸之助は自身の不眠と睡眠薬について、ところどころで散発的に語っているが、入手が容易な文献で参考になるものとして、『社員稼業――仕事のコツ・人生の味』(PHP研究所、2009年新装版)所収の「生きがいをどうつかむか」、および『人を活かす経営』(PHP研究所、2006年新装版)所収の「自分の運命に従う――気に病まずに対処する」、のふたつがあげられる。なお、筆者自身は本稿の執筆にあたって、前者は1991年文庫版、後者は1989年文庫版を、それぞれ参照した(新装版と内容は同じ)。

(17) たとえば、前掲『社員稼業』35頁。

(18) 和歌山県知事公室広報公聴課発行『県民の友』1979年1月号掲載の仮谷志良知事(当時)との対談での発言。PHP総合研究所研究本部(編)『松下幸之助発言集16』(PHP研究所、1991年、126頁)に収録。

(19) 1983(昭和58)年1月27日に評論家の草柳大蔵と対談した際の発言。PHP研究所経営理念研究本部所蔵の速記録による。

(20) 前掲『社員稼業』34頁。

(21) 前掲『人を活かす経営』164頁。

(22) たとえば、前掲『社員稼業』34頁や、前掲『人を活かす経営』164頁を参照。

(23) 林辰彦『実録・井植学校――関西経営者を育てた思想と哲学』ダイヤモンド社、1985年、8頁。筆者不明のほとんどまったく同じ文章が、『株界』1967年8月号(25-6頁)にみられるので、このころの発言かと思われる。

(24) たとえば、前掲『人を活かす経営』165頁を参照。

(25) 同前、165頁。

(26) 齋藤周行『拝啓　松下幸之助殿』一光社、1976年、164-6頁。

(27) 睡眠薬を飲んでも眠れず、さらに飲酒したという可能性はなくはないが、そのような生命を脅かす危険のある行為はさすがにしなかったと思われる。

(28) 『週刊文春』1961年9月25日号、84頁。

(29) 津田真人「『健康ブーム』の社会心理史:戦後篇」『一橋論叢』第118巻、1997年、507頁。

(30) 戦後の高度成長期における「アトラキシン」をはじめとしたトランキライザーの流行とその後の規制については、松枝亜希子「トランキライザーの流行――市販向精神薬の規制の論拠と経過」(『Core Ethics』第6巻、2010年、385-99頁)を参考にした。

(31) 『週刊文春』の記事と同年の1961(昭和36)年に発表された谷崎潤一郎の小説「瘋癲(ふうてん)老人日記」では、主人公の老人が日記に、「昨夜モ夜ッピテ安眠デキナカッタノデ、再ビアダリン三錠トアトラキシン三錠ヲ飲ミ……」と、睡眠薬として飲んでいることを記している(『日本の文学25　谷崎潤一郎(三)』中央公論社、1967年、474頁)。

(32) 前掲「『健康ブーム』の社会心理史:戦後篇」505-6頁。

(33) 岩崎爾郎・加藤秀俊『昭和世相史〈1945～1970〉』社会思想社、1971年、101頁。

(34) 前掲「『健康ブーム』の社会心理史:戦後篇」504頁によると、「合成薬の生産額は、朝鮮動乱以降、年平均三〇%と、一貫してGNPを上回る驚異的な伸び率を示し、早くも一九六一年にはアメリカに次ぐ世界第二位の産業にのしあがっている」。

(35) 同前、505頁。

(36) 同前、506頁。

(37) 前掲「トランキライザーの流行」387-8頁は、1957(昭和32)年と1958(昭和33)年当時の「アトラキシン」の新聞広告の実例を紹介している。

(38) 同前、395頁。

(39) 前掲『松下幸之助発言集14』63頁。

(40) 横尾定美『心身一如――松下幸之助創業者に学ぶ健康哲学』松下電器健康保険組合、

1997年、56頁。
(41) 松下幸之助『ＰＨＰのことば』ＰＨＰ研究所、1975年、326-7頁。
(42) 同前、330頁。
(43) 前掲『人を活かす経営』167頁。
(44) 同前、167頁。
(45) 前掲『松下幸之助発言集14』64頁。
(46) ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集29』ＰＨＰ研究所、1992年、213頁。
(47) たとえば、鹿野政直『健康観にみる近代』（朝日新聞社、2001年）の第3章「『体力』の時代」を参照。
(48) どの程度「受け入れている」のかは、前掲「松下幸之助と生長の家」86-7頁を参照。
(49) 前掲『ＰＨＰのことば』224-5頁。
(50) 注（12）で先述した、『女性自身』1976年8月12・19日合併号に掲載するために行った対談の速記録（1976年7月3日、ＰＨＰ研究所経営理念研究本部所蔵）からの抜粋。
(51) 幸之助の発言はおそらく事実であると考えられる。というのも、アシックスの創業者である鬼塚喜八郎も、かつて結核にかかり「カルシウム注射」を毎日打ったと述べている。「結婚して半年後の昭和二十七年春、出張先の広島で突然喀血（かっけつ）した。急いで神戸に戻り、医者にみせると『肺結核が進行中で絶対安静、即入院を要す』。（中略）当時は結核のいい治療薬がなく、毎日カルシウム剤を血管注射する程度。そのうち血管がつぶれて腕にできなくなり、手の甲に注射するようになった」（『日本経済新聞』1990年7月13日付朝刊）。ただ、結核の新薬が開発されたので、「カルシウム注射」を打った期間は、幸之助よりずっと短く、半年ほどだったという。
(52) 市販薬の入手にあたって、幸之助がみずから購入していたかどうかはわからない。朝鮮人参などはもらうこともあると発言しているので（前掲『松下幸之助発言集14』67頁）、ローヤルゼリーも贈答品である可能性は否定できない。しかし、「アトラキシン」のような精神安定剤まで贈答品とは一般に、考えづらい。
(53) 前掲『心身一如』56頁。
(54) 前掲『松下幸之助発言集14』64頁。
(55) 鈴木貞美が「大正生命主義」を論じた文献は複数あるが、『生命観の探究――重層する危機のなかで』（作品社、2007年）がもっとも詳しい。
(56) 1950（昭和25）年2月23日の第25回ＰＨＰ定例研究講座「人間としての成功」の速記録（ＰＨＰ研究所経営理念研究本部所蔵）、17-8頁。
(57) 同前、23-5頁。
(58) 研究会の抄録は、ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集43』（ＰＨＰ研究所、1993年）に掲載してある。
(59) 松下幸之助『人間を考える――新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』ＰＨＰ研究所、1995年。
(60) 前掲『ＰＨＰのことば』407頁。

《参考文献》

・荒川進『苦労と難儀はちがいます――松下幸之助の妻・むめの伝』講談社、1985年
・岩崎爾郎・加藤秀俊『昭和世相史〈1945～1970〉』社会思想社、1971年
・鹿野政直『健康観にみる近代』朝日新聞社、2001年
・川上恒雄「松下幸之助と生長の家――石川芳次郎を介して」『論叢 松下幸之助』第13号、ＰＨＰ総合研究所、2009年
・齋藤周行『拝啓 松下幸之助殿』一光社、1976年
・佐藤悌二郎『松下幸之助・成功への軌跡――その経営哲学の源流と形成過程を辿る』ＰＨＰ研究所、1997年
・鈴木貞美『生命観の探究――重層する危機のなかで』作品社、2007年
・谷崎潤一郎「瘋癲老人日記」『日本の文学25 谷崎潤一郎（三）』中央公論社、1967年所収
・津田真人「『健康ブーム』の社会心理史：戦後篇」『一橋論叢』第118巻、1997年、503-21頁
・林辰彦『実録・井植学校――関西経営者を育てた思想と哲学』ダイヤモンド社、1985年
・ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集14』ＰＨＰ研究所、1991年
・ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集16』ＰＨＰ研究所、1991年
・ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集17』ＰＨＰ研究所、1991年
・ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集29』ＰＨＰ研究所、1992年
・ＰＨＰ総合研究所研究本部（編）『松下幸之助発言集43』ＰＨＰ研究所、1993年
・松枝亜希子「トランキライザーの流行――市販向精神薬の規制の論拠と経過」『Core Ethics』第6巻、2010年、385-99頁
・松下幸之助『記憶のまま』松下電器産業株式会社、1952年
・松下幸之助『ＰＨＰのことば』ＰＨＰ研究所、1975年（初版1953年）
・松下幸之助『私の行き方 考え方――わが半生

の記録』ＰＨＰ研究所、1986 年文庫版（初版 1954 年、甲鳥書林）
・ 松下幸之助『仕事の夢 暮しの夢――成功を生む事業観』ＰＨＰ研究所、1986 年文庫版（初版 1960 年、実業之日本社）
・ 松下幸之助『社員稼業――仕事のコツ・人生の味』ＰＨＰ研究所、1991 年文庫版（初版 1974 年）
・ 松下幸之助『人を活かす経営』ＰＨＰ研究所、1989 年文庫版（初版 1979 年）
・ 松下幸之助『人間を考える――新しい人間観の提唱・真の人間道を求めて』ＰＨＰ研究所、1995 年
・ 松下幸之助『リーダーを志す君へ――松下政経塾 塾長講話録』ＰＨＰ研究所、1995 年文庫版（初版 1981 年）
・ 松下幸之助・田川五郎『明日をひらく経営』読売新聞社、1982 年
・ 横尾定美『心身一如――松下幸之助創業者に学ぶ健康哲学』松下電器健康保険組合、1997 年

「確かな松下幸之助情報」をお届けする Web サイト

松下幸之助.com

2010 年 10 月 1 日オープンしました！

詳しくはこちら▶ http://konosuke-matsushita.com

「松下幸之助」に関する「確かな情報」を集約し発信していくことを目的として、
この Web サイトは生まれました。今後、「月刊松下幸之助」コーナーにおける連載や
発刊図書に関するご注文・内容紹介・検索機能等、さまざまな視点からの情報提供を企画し、
皆様にお役立ていただける Web サイトになるよう内容充実を心がけてまいります。
どうぞご愛顧賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

ＰＨＰ研究所経営理念研究本部
出版開発チーム

〈サイト運営管理担当〉
ＰＨＰ研究所事業開発本部（東京） TEL：03-3239-6245 FAX：03-3239-5386